

修士論文（要旨）

2019年1月

高齢者の死の捉え方
—デスカフェ参加者を対象として—

指導 長田 久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

216J6904

藤井 圭

Master's Thesis(Abstract)
January 2019

Elderly People's Understanding of Death: Focusing on Death Cafe Participants

Kei Fujii

216J6904

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Hisao Osada

目次

第1章	研究の背景.....	1
1.1	死に対する知識や経験の機会の減少	1
1.2	高齢者が死に抱く感情	1
1.3	新たな活動やムーブメントの出現.....	1
1.4	高齢者の死生に関する先行研究	2
第2章	研究の目的と意義	3
2.1	研究の目的	3
2.2	研究の意義	3
第3章	研究の方法.....	4
3.1	対象	4
3.2	調査期間	4
3.3	調査方法	4
3.4	倫理的配慮.....	4
3.5	調査内容	5
第4章	結果	6
4.1	分析対象の属性.....	6
4.2	各事例のストーリーライン、理論記述およびさらに追及すべき点・課題.....	6
第5章	考察	10
5.1	デスカフェ参加に至るプロセス	10
5.2	デスカフェがもたらすもの	10
5.3	本研究の限界と課題.....	11

謝辞

引用文献

資料

第1章 研究の背景

近年「終活」や「デスカフェ」とよばれる活動がみられるようになった。このようなムーブメントが見られるようになったのは、高齢者にとって身近な問題である死というものに関する語り合いや死にまつわる不安や懸念の払拭をしたいという希求が要因となっていることが推測される。

第2章 研究の目的と意義

死に対する多様な考えがあるなか、死に対する不安への具体的な対処や心も持ちようについて相談できる場所の認知が低いことが指摘されている。しかし、生と死について考え語り合う場がもつ意義や役割、またそのような場の必要性について研究した報告は少ない。

本研究では、デスカフェ参加経験のある高齢者が死を語り合うことをどのように感じているのか、また、どのように死の捉え、どのように対峙しているのを分析することで死をテーマとして語り合う場が参加する高齢者にとってどのような意味をもつのかを明らかにすることである。

本研究の意義は二点ある。一点は、さまざまな人生経験を持つ高齢者が生と死をどのように捉え、どのような意図でデスカフェのような死を語り合う場への参加をしたのか、そのプロセスが明らかになる点である。もう一点は、デスカフェが先行研究で述べられた「生と死を考える場の必要性」に合致しているか、参加者に対しデスカフェがどのような効用があるのかが明らかとなり、高齢者におけるデスカフェのもたらす意義を判別する示唆が得られる点である。

第3章 研究の方法

デスカフェや終活カフェなど、死をテーマとして語り合う会に参加経験のある65歳以上の高齢者を対象とし半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。質的データ分析手法「SCAT (Step for Coding And Theorization)」を用いた。分析手続きが明示化され、分析過程の省察可能性が担保されている点が科学的な分析方法であることや、比較的小規模の質的データにも有効だとされることを鑑み、採用することとした。

なお、本研究は桜美林大学研究倫理委員会の承諾を取得した（承認番号は18004）。

第4章 結果と考察

分析対象の属性は男性2名、女性2名の計4名、平均年齢69.8歳であった。SCATの手法に則り、各事例のストーリーラインの記述、理論記述を行った。

今回の4名のインタビューによりデスカフェ参加のプロセスとして、参加を通じてそれぞれが死を迎えるまでの生をどのように過ごすかという命題に立ち向かっていることが示された。これは、死を迎えるまでの生き方を考え、若年者に比し短いと考えられる高齢者にとっての生を充実したものにしたいという気持ちの表れと言える。また、カフェは死に

対する考え方に一定の回答を導き出したり正否を明らかにする場ではなく、多様な考えがあるということを受け止め、さらに自分の思慮を深めるきっかけとなる場であることも示唆された。これは、デスカフェを「自らの考えを整理するための場」として捉え、そのために次回以降も参加したいという意思として表出したものであり、参加者がこの重要性を把握しつつデスカフェ参加という行動に移しているものと考えられた。

また、デスカフェによりもたらされるものとして、死に関連する気持ちの安定や整理に役割を果たしていることが示された。高齢者にとって、これまでの人生経験を通じ自分の死を見つめつつ自分の生を振り返り、これからの生について考え、自らの意見を語ったり他者の意見を聞くことは生きる意味の追及に役立つ。その上でデスカフェの存在意義は大きいと言える。

本研究の限界について述べる。まず、日本において現時においてデスカフェの開催はまだ一般的とは言えない。国内のデスカフェ開催状況はまだ正確なデータとしては把握されておらず、多くは数ヶ月に1度か不定期的な開催であり、1度だけイベント的に開催されているものも少なくない。そのような中でデスカフェへの参加経験を持つ人の数も少なく、本研究における分析対象者が4名と少ない。本研究で得られた理論について検証するためには、より大規模な調査を行う必要が考えられる。

また、死をネガティブに捉える人たちの意見やデスカフェ参加による負の影響、カフェに対する否定的な意見が収集できていない。徐々に広がりを見せるデスカフェのムーブメントに注視し、今後の更なる検討が必要と考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいたデスカフェ主宰者・参加者の皆様、そしてご指導いただきました桜美林大学大学院老年学研究科の先生方に深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 厚生労働省：平成 28 年簡易生命表の概況.(2016)
- 2) 厚生労働省：平成 27 年人口動態統計月報年計(概数) の概況.(2015)
- 3) 厚生労働省:第 1 回全国在宅医療会議,参考資料 3「在宅医療にかかる地域別データ集」.(2016)
- 4) 一般財団法人日本消費者協会「第 10 回葬儀についてのアンケート調査」.(2014)
- 5) Gorer, G. The pornography of death. *Encounter*, October, 49-52.(1955)
- 6) デーケン A：死を教える (<叢書>死への準備教育；第 1 巻). メヂカルフレンド社, 東京(1986)
- 7) デーケン A：死とどう向き合うか. 日本放送出版協会, 東京(1996).
- 8) デーケン A：よく生きよく笑いよき死と出会う, 新潮社, 東京(2003).
- 9) 平山正実：死生学とはなにか. 日本評論社, 東京(1991).
- 10) 針金まゆみ：老年期における死に対する態度と老いへの準備行動. 桜美林大学博士論文, (2012)
- 11) 長崎雅子：年代および性別による死生観の違い —非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して—. 島根県立看護短期大学紀要, 12:9-18.(2006)
- 12) 酒井陽子：入院した高齢患者の自らの生(死)に対するイメージの実態 事前に自分の生き方を自己決定できるための支援のあり方. 国立病院看護研究学会誌, 4(1):20-24.(2008)
- 13) 木村由香、安藤孝敏：エンディングノート作成にみる高齢者の「死の準備行動」. 応用老年学, 9 (1) :43-54.(2015)
- 14) 岡本美代子：都市と地方における高齢者の死生観と終活の現状. 医療看護研究, 13(2): 62-69.(2017)
- 15) Baldwin PK : Death Cafés: Death Doulas and Family Communication. *Behav. Sci* ,26.7(2).(2017)
- 16) 堀薫夫：大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較. 大阪教育大学紀要第IV部門, 44(2):185-197.(1996)
- 17) 中木里実、多田敏子：日本人高齢者の死生観に関する研究の現状と課題. 四国大学紀要, (A)41:1-10.(2013)
- 18) 大谷尚. 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学 54 (2) : 413-417.(2007)
- 19) 大谷尚. 質的研究シリーズ SCAT : Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学,10 (3) : 155-160.(2011)
- 20) 井出訓、石丸雅彦：死生学入門 8. 老いと死. NHK 出版, 東京(2014)
- 21) 彦聖美：高齢者が捉える生と死に関する文献検討. ホスピスケアと在宅ケア, 19(1):42-49.(2014)